

政府統計部門において任期付等で採用された職員の声

目次

◇内閣府で活躍する職員◇

任期付職員・大学より	間 真実……………	p.2
	(経済社会総合研究所・研究専門職)	
	鈴木 俊光……………	p.3
	(経済社会総合研究所・研究専門職)	
非常勤職員・独立行政法人等より	佐藤 嘉子……………	p.4
	(経済社会総合研究所・上席政策調査員)	
非常勤職員・民間企業より	岡崎 康平……………	p.5
	(経済社会総合研究所・政策調査員)	

◇総務省で活躍する職員◇

任期付職員・大学より	倉田 知秋……………	p.6
	(政策統括官付・統計審査担当主査)	
	坂田 大輔……………	p.7
	(政策統括官付・統計審査担当主査)	
任期付職員・民間企業より	中西 幸子……………	p.8
	(政策統括官付・統計審査担当主査)	
任期付研究員・大学より	佐野 夏樹……………	p.9
	(統計研究研修所・研究専門官)	
官民交流採用職員・大学より	櫻川 幸恵……………	p.10
	(政策統括官付・統計委員会担当室長)	

◇経済産業省で活躍する職員◇

官民交流採用職員・民間企業より	高橋 一将……………	p.11
	(大臣官房調査統計グループ・業態別係長)	

※掲載している情報は、平成 30 年 9 月 1 日時点のものです。

◇内閣府で活躍する職員（任期付職員・大学より）◇



はざま まこと
間 真実

H28.4～ 内閣府経済社会総合研究所 景気統計部

研究専門職

一橋大学大学院経済学研究科博士後期課程より 修士（経済学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. RA（Research Assistant）としてお世話になっていた研究者から紹介いただきました。大学院での研究が完全に頓挫して失意に沈んでいたところだったので、大変ありがたいと思いました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 内閣府の景気動向指数を作成・公表する業務とそれに関連する調査・研究業務に従事しています。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. 大学院のコースワークで学んだ計量経済学の知識が、景気動向に関する調査・研究業務に役立っています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 2017年から2018年にかけて行政に対する国会・国民の信頼が損なわれる事案がいくつかあり、行政府の一員として心苦しく、また無力感があります。研究活動に関しては、大学院時代の行き詰まった研究テーマ（ネットワークの経済分析）とは全く別のテーマ（景気分析）で学ぶことができたのが、精神的にはよかったです。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 研究業務では、時系列分析の比較的新しい手法について自前でコードを作成しなければならないことがしばしばあり、プログラミングの経験を積むことができました。当初、自分には無理とされていた処理も、必要に迫られて、苦心するうちに達成することができた経験は、今後遭遇するかもしれない困難において、自信というかたちである程度は役に立つと思います。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 「人を磨くのは人である」というのは本当だと思います。私自身はこの職場で、よい意味での役人精神を追求する人々に磨かれていると思います。

すずき としみつ
鈴木 俊光

H27.7～ 内閣府経済社会総合研究所 国民経済計算部企画調査課 研究専門職

中央大学経済学部（任期制助教）より 博士（経済学）（労働経済学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. 元々は、研究活動で培ってきた知見や統計処理技能を用いて、官公庁における実際の経済政策効果の分析・検証業務にどの程度貢献できるのかといった点に興味があり、前職では経済分析部局に在籍していました。

分析業務を担当する中で、統計作成部局での経験が経済指標のより深い理解につながり、自らのアカデミックキャリアにとってもプラスになると思い、現在の職場への異動を希望しました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 現在所属する部局では、わが国の国民経済計算（JSNA）等の推計・公表業務を行っており、その中でも自らの担当業務としては、新たな JSNA の推計方法の検討・開発ならびに実装作業等を担っています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 現在の職場は、他の行政機関や民間企業からの出向者など様々なバックグラウンドを持った方々と共に業務を進めていくため、専門性の高い用語や概念、分析手法などをいかに他人に分かりやすく説明する能力や資料作り等が重要である点を痛感しており、これらは研究者が研究成果の对外発信を行っていく場合においても重要な点であり、業務経験が個人の研究活動においてもプラスに働くものと認識しております。

個人の研究活動との両立については、毎年、数回の学会報告や論文執筆などを行っており、今年度においては、担当業務の一環としても学会報告を行ったところです。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 一国経済全体をフロー、ストック両面において包括的かつ整合的に記録する JSNA においては、各種の制度変更や経済事象が起き、推計手法に反映させる場合、それらが一国の経済社会に与える影響を見通すことは当然のことであるが、同時に、推計に用いる統計データの調査対象や調査方法、データ加工方法などから経済指標の“クセ”を把握することが重要になります。そのような経済指標の“クセ”を把握することは、より実態に即した経済動向の把握を可能にし、これらは政府統計部門での勤務経験をとおりて培われるものであると思います。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 政府統計部門を目指す皆様におかれましては、周知の方も多いと思われそうですが、よく統計は社会に必要な不可欠なソフトインフラであると言われる。統計は、政府の経済政策のみならず、民間企業の経営計画立案においても重要な判断材料となります。現在、SDDS プラス(Special Data Dissemination Standard Plus)や DGI(Data Gaps Initiative)といった国際的な統計整備の取

組みも加速している中で、統計作成業務を通じて、わが国、ひいては国際社会に貢献できる仕事に、是非取り組んでみてください。

◇内閣府で活躍する職員（非常勤職員・日本銀行より）◇

さとう よしこ
佐藤 嘉子

H29.7～ 内閣府経済社会総合研究所 国民経済計算部 国民資産課 上席政策調査員

日本銀行調査統計局より 博士（応用経済学）

Q. 政府統計部門への派遣のお話を受けた時、どのように思われましたか。

A. 前職とは関係が深い業務でしたので、未知の分野に入るという不安はありませんでした。ただ「政府統計」の作成に従事するのは初めてでしたし、経験のない実体経済面の計数を作成することになりますので、果たして務まるのかなとも感じていました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 「国民経済計算」という一国全体の経済活動を表す統計を作成しています。前職の日本銀行では金融統計（資金循環統計）を作成していました。お金の流れや金融資産・負債の残高については、国民経済計算の「金融勘定」の作成を通じて引き続き関わっています。

さらに現在の部署では、家計や企業、政府などの投資活動を表す「資本勘定」や、その結果として蓄積する資本ストックや国富を「期末貸借対照表」として表すことも仕事となりました。やや大袈裟かもしれませんが、実体経済と金融が接合する、ある意味もつとも面白い部分の統計の作成を担当させていただいています。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. 金融面についてはこれまでの業務の延長線上にありますので、知識や経験はそのまま活かされていると思います。基礎統計の計数の作り方を知っていると、金融勘定の動きをその背後にある事象を含めて具体的に説明できることもあります。

加えて、国民経済計算も金融統計もどちらも SNA という共通のフレームワーク（統計の国際基準）に基づいて作成されていますので、考え方にも共通点が多いと感じています。この点は、定例業務が進めやすくなるのはもちろんですが、新たな統計を整備する場合にも大きな要素になっています。たとえば前職で国際的な取組みとして計数の公表を開始したことがあり、同じ取組みの一環として現在の職場でも新たに計数を作成して公表することになりました。同じ SNA というフレームワークの中にあると、議論する国際会議が共通していますので、これまで議論されてきた文脈や経緯を踏まえて、国際機関が何を意図しているのかといった勘所をつかみやすくなります。結果的に、計数固めや公表事務が行いやすくなったと感じています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 一方でこれまでになかったのは、統計で利用する主な基礎計数が、同じく「政府統計」であるという点

です。「政府統計」と一口にいってもそれぞれの行政機関がそれぞれ作成している個別の統計ですので、目指す方向についての考え方も微妙に異なることがあるようです。

国民経済計算では、それら複数の政府統計を基礎資料としながら一国全体の勘定（National Accounts）にまとめあげていきます。統計精度の考え方やその向上のためにかけるコストのバランスなどがそれぞれ異なる基礎統計を使いながら、ひとつの体系だった統計を作ることは、かなり難易度の高い作業であると感じています。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 国民経済計算の作成にはまだ携わってから間もないので、さらに理解を深めてより一層使いやすい統計、有用性の高い統計にしていきたいです。そのうえで、日本の統計はこんなにすばらしいと諸外国に紹介することができたらと考えています。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. ぜひチャレンジして欲しいと思います。そして仮にひとつの政府統計の作成を担当することになったら、その統計の目的だけをみるのではなく、国全体の統計システムの中でその政府統計がどのような役割を担っているのかを捉える視点を持って欲しいと思います。こうした視点が、統計の質を全体として高めていくと考えています。

◇内閣府で活躍する職員（非常勤職員・民間企業より）◇

おかざき こうへい
岡崎 康平

H29.4～ 内閣府経済社会総合研究所 国民経済計算部価格分析課 政策調査員

野村證券・経済調査部より 公共政策学修士（MPP）

Q. 政府統計部門への派遣のお話を受けた時、どのように思われましたか。

A. 出向元では日本経済担当のエコノミストとして経済分析を行っていたこともあり、馴染みのある国民経済計算の作成に携われることは大変光栄であると感じました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 三つの業務に携わっています。第一に、国民経済計算部・価格分析課にて QE/年次推計のデフレートを推計しています。第二に、同企画調査課にて生産側 QNA（産業別 GDP）の四半期化に向けた開発を行っています。第三に、研究官室にて医療デフレートの研究活動に関わっています。出向元での業務とどれも関係深いものですが、内閣府での業務は統計の在り方についてより深い理解を要するものとして日々勉強することが多いです。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. あくまで一例ですが、生産側 QNA の開発作業では統計ユーザーとしてのバックグラウンドの視点を大切にしています。また、医療デフレートの研究活動では、先行研究を参照する際や、得られたデータを精査する際に、経済学や統計学の知識を活かしています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 課や部をまたがる形で三つの業務に携わっていますが、働き方は自由度が高く、ストレスなく業務に集中できていると思います。府内で開かれる研究会・講演会を傍聴したり、職員のための研修（経済学等の理解を深めるもの）に参加していますが、業務外でも学びの場があることは大変素晴らしいことだと思います。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 国民経済計算の理解が深まったことにより、将来の分析業務に幅の広がりがあると感じています。また、研究会・講演会や研修、そのほか業務を通じた議論を通じて、改めて経済学や統計学の理解を深めたいという意欲が高まり、自身のキャリアにも広がりができたと感じています。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. じっくり腰を据えて政府統計の在り方を検討できる場所は、基本的には政府内のみだと思います。統計実務を知ることで見えてくる世界も広いですし、ぜひ勤務を検討されると良いと思います。

◇総務省で活躍する職員（任期付職員・大学より）◇



くらた ともあき
倉田 知秋

H30.4～ 総務省 政策統括官（統計基準担当）付統計審査官室

統計審査担当主査

大学非常勤講師より 修士（経済学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. 統計分野の研究を進める上で、実際の統計作成の現場を見て学ぶ貴重な機会であると考えて応募しました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 産業連関表の SUT（供給表・使用表）体系への移行方法の検討。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. これまでの調査・統計分析の経験から統計を活用し SUT 体系への移行に関わる資料の作成を行っています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 統計作成の現場に勤務することによって日々多くの貴重な知見や情報が得られ、外部からではわかりにくい統計実務を経験できます。さらに、関連する学会や専門の研究者とのつながりもあります。これらは専門分野の研究活動においても大いに役立つでしょう。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 現在の業務が一次統計、加工統計の両方に関わるところにあるため、統計作成やその議論の過程を知ることができ、これはきわめて貴重な経験です。この経験は、統計の表面的な理解にとどまらない統計分析の深い洞察力を養い、今後の研究の糧になると思われます。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 多くの貴重な経験や情報が得られます。政府統計部門を研究するのならば一度は実務に関わって統計作成の理解を深めることをお勧めいたします。



さかた だいすけ
坂田 大輔

H29～ 総務省 政策統括官（統計基準担当）付統計審査官室

統計審査担当主査

立教大学社会情報教育研究センターより 博士（経済学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. 私は統計制度の形成過程を研究対象としていたため、近年の統計制度に関する議論の進展についても非常に関心がありました。そのような中で、生産物分類という新しい統計分類の策定が検討されていることを知り、新しい統計制度の形成に実際に携われるという点に非常に魅力を感じました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 現在、財を分類するための統計分類として日本標準商品分類がありますが、最終改訂からずいぶん時間がたってしまっています。また、サービスについての統計分類はこれまでありませんでした。そこで、財とサービスを分類する新たな分類である生産物分類の策定が進められています。私はヒヤリングやアンケート調査、その他各種資料に基づく業界研究を通して、財に先立って分類策定が進められているサービスについての分類原案を作成する作業に携わっています。また、生産物分類について学会で報告するといった業務などにも携わっています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 自宅などで業務を行うことが出来るテレワークはかなり体制が整っており、業務負担の軽減が図られていると感じました。研究活動にはご理解を頂いており、業務量はかなり配慮して貰っています。着任した昨年度は、不慣れな部分も多く、忙しい時期もありましたが、学会や研究会などでの報告を行うことは出

来ました。また、今年度は業務の成果を学会で報告するという機会も得られました。もちろん、時間面が全く制約にならないというわけではありませんし、大学時代に閲覧できていた文献へのアクセスが難しくなるなどの制約もありますが、業務と研究活動の両立は可能であると思います。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 業務を通じて統計に関する様々な情報に接する機会があります。また、政策統括官（統計基準担当）は統計局や統計センターと同じ庁舎に入っており、傍聴可能な研究会や勉強会のテーマも多彩です。統計に対する多面的な知見を得られることは、研究を続ける上でかけがえのない財産になると思っています。

◇総務省で活躍する職員（任期付職員・民間企業より）◇



なかにし さちこ
中西 幸子

H30.4～ 総務省 政策統括官（統計基準担当）付統計審査官室
統計審査担当主査
信用金庫融資部案件担当より

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 生産物分類策定における分類業務を担当しています。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. 生産物分類策定の調査研究において、前職にて馴染みのある業界については、企業の実態が具体的に想像できたり、理解できることが活かされていると思います。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 自分がやっていた、金融機関における与信判断や事業性評価の業務のイメージがありましたが、GDP 推計作業の一連の流れを意識しながら企業の売上を整理するなど、とてもスケールの大きな仕事であることを実感いたしました。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 今後、どのような業種・業界においても役に立つと思います。前職の金融業界の場合では、法人融資案件を検討する際に、決算書の数字だけではなく事業性評価の観点で企業を分析する際に、生産物分類の各業界の調査研究が大いに役に立つと思います。

◇総務省で活躍する職員（任期付研究員・大学より）◇



さの なつき
佐野 夏樹

H30.4～ 総務省統計研究研修所 研究開発課

併任 統計技術向上支援課

研究専門官

尾道市立大学より 博士（工学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. 勤務時間が重なる平日には非常勤講師等ができない^{※1}ことを言われ、当初、悩みましたが、官庁での新たな出会いや新たな技能を身につければ、今後、活躍の場が広がると思い、応募しました。

※1 他の国家公務員と同じく、任期付職員も副業が原則禁止されているが、土日限定の非常勤講師については、国家公務員法104条に基づき兼業申請を行うことで、兼業可能。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 国勢調査等のマイクロデータは、個人のデモグラフィック属性^{※2}、価値観、行動様式を表す個人情報であり、マイクロデータを分析することにより、我が国の経済や個人の状況に関する知見を得ることができます。一方で、これらのデータを原データのまま、公開してしまうと個人の特定につながり、機密事項の漏洩につながる可能性もあります。私は、現在、マイクロデータを分析する際に必要となる本質的な情報を保存しながら、原データとは異なるデータに変換するマイクロデータの秘匿手法に関する研究開発業務を行っています。

※2 性別、年齢、居住地域、所得、職業、家族構成など、人口統計学的属性のこと。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. 私は、これまで、大学や研究所で統計手法や機械学習手法を利用して、POS データ等の購買履歴データ、給湯量等の電力需要データ、RFIDタグを使って収集したセンサー情報等の様々なデータの分析に関する研究を行ってきました。また以前に勤務していた研究所の業務でプライバシーを保護しながらデータを収集する手法の研究を行っていたので、これらの知見は、現在の業務に活かされていると感じます。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 官庁という国の機密文書を取り扱う機関なので、情報セキュリティが厳しく、制約条件もありますが、学会活動等、研究する時間は大学に比べ、ある様に思います。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 統計局等の政府統計部門は、政策の立案や国民への情報提供のため、様々な調査を実施し、統

計データを収集、公開していますが、その種類は多岐に渡ります。それらのデータは、価値ある知見を得て、研究成果を生むための潜在的な可能性はあると思いますが、どの様に使えば、良いかは、今の私には、わからない部分もあります。政府統計部門での勤務は、今後、統計データを適切に、効果的に利用した研究を行う上で役立つと感じています。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 昨今の AI ブームにより、データサイエンティストの需要は、民間企業を中心に高まっていますが、官庁でもデータサイエンティストへの期待は高まっています。自分の専門を磨いて行けば、活躍する場所はあると思います。

◇総務省で活躍する職員（官民交流採用職員・大学より）◇



さくらがわ ゆきえ
櫻川 幸恵

H30.4～ 総務省 政策統括官（統計基準担当）付統計委員会担当室長
跡見学園女子大学より 博士（経済学）

Q. 政府統計部門で勤務しようと思われたきっかけを教えてください。

A. 前任者から、現在、政府統計、特に経済統計の改革のさなかであり、その中核を担う業務に関わることができる、というお話を伺ったことがきっかけです。統計委員会担当室長という立場は、各府省の利害から離れた中立的な立場の人が務めることが、各府省にまたがる統計の改善をはかる上でも重要で、外部からの人材が必要となっている、というお話も、私が役に立つことがあればという思いに至った理由の一つです。加えて、私自身にとっても、統計に関わる知識を、ユーザーという観点からだけでなく、深めることができる点はプラスになると思い、大学という組織以外で、より多くの人たちと協力しながら働くことも、自分のスキルの幅を広げる経験となると考えました。

大学には、この勤務を終えた後に戻ることになっており、異なる仕事に就くことのリスクが小さいことも、自分の決断を後押ししました。経験を積んで成長して戻ってきてください、と快く送り出してくださった大学に深く感謝しています。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 統計委員会の開催に向けて準備を進め、密度の濃い適切な審議等を実現できるように、統計委員会委員の先生方と連絡をとり、統計委員会担当室内および関連部署との連携をはかるなど、調整を行っています。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. 経済学や統計の知識は、統計委員会で取り扱う案件への理解や判断において、役に立っています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. 政府全体として、政府統計に関わる人たちが、考えていたよりも少ない中で、日々の業務をされていることに関して、非常に驚きました。真摯に熱心に業務に取り組まれている人たちに囲まれながら仕事ができていることを非常にありがたく思うとともに、今後の政府統計の品質を維持・改善していくためには、人材の確保が急務であると感じています。

研究職併任でこの職に就いてはいますが、勤め始めてまだ半年なので、統計委員会担当室の業務をこなすことで精一杯で、基本的に知識や経験のインプットの時期として捉えています。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 視野が広がり、人脈も広がる点。

職務上、統計の調査報告者や作成者、利用者、そして統計学者など、多岐に渡る視点から、統計や統計調査を検討する場に立ち会うことになり、様々な立場からの考えを聞くことができます。また、そうした中で、なすべきことをなすための判断を下していく過程をつぶさに拝見させていただくことは、今後、自らがバランス良く物事を捉え、かつ、判断する際に、非常に役に立つと思っています。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 研究者の方で政策への含意を念頭において研究をされているのであれば、現実には政策などが決まっていってプロセスに身を置いてみることは、研究課題を見つけることに加え、研究成果を社会に還元させていく際に、大きなプラスの経験となると思います。

全般的に申し上げれば、統計の知識やデータ分析のスキルをもつ人たちへの社会的ニーズは、政府部門にとどまらず、非常に高いものがあると思います。政府統計はインフラストラクチャーとしての高い価値を持っていますので、そうしたものに関わるとい志をもつ方にぜひ目指していただきたいと思います。

◇**経済産業省で活躍する職員（官民交流採用職員・民間企業より）**◇



たかはし かずまさ
高橋 一将

H30.7～ 経済産業省 大臣官房調査統計グループサービス動態統計室

業態別係長

アニコム損害保険株式会社より

Q. 政府統計部門への派遣のお話を受けた時、どのように思われましたか。

A. 今までの業務とは全く異なる分野であるため不安に感じましたが、その一方で、

統計は今後の社会人人生で必ず役に立つためぜひ現場で経験を積んで知識を習得したいとも思いました。

Q. 担当されている業務について教えてください。

A. 商業動態統計調査の見直しに係る検討等です。具体的には、①試験調査の実施対応及び調査結果の検証作業、②調査票及び調査事項に係る検討、③統計委員会への諮問に係る準備等です。

Q. ご自身の知識や業務経験は、仕事でどのように活かされていますか。

A. プロジェクトの進め方、課題管理、システムなどで活かされています。

Q. 実際に勤務してみた感想をお聞かせください。

A. チームの各員それぞれがプロフェッショナルとして業務を担当しており、大変勉強になります。また、統計の見直しなど政府統計の変化の最前線に携わる貴重な場で活躍することが出来るところは良いと感じました。

Q. 政府統計部門での勤務経験は、将来どのように役立つと思いますか。

A. 「統計リテラシーの向上」、「統計の企画から実査の流れ、集計などフローの把握」、「統計の見直しなど、政府統計の変化の最前線に携わった経験の活用」という形で役立つと思います。

Q. 最後に、これから政府統計部門を目指す方へのアドバイスをお願いします。

A. 政府統計を作り上げる一員として貴重な経験を積むことが出来ます。統計を作り上げる経験は多様な分野で活用が出来ますので、自身の能力向上のためにもチャレンジしてみたいかがでしょうか。